

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 宮古諸方言の音韻：体系と比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペラール, トマ, 林, 由華 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002461">https://doi.org/10.15084/00002461</a>

## 宮古諸方言の音韻

### 一體系と比較—

トマ ペラール・林 由華

#### 1 はじめに

宮古諸方言は、沖縄県宮古島市および多良間村で話される南琉球諸方言の一種である。集落ごとに方言が異なり、差異の程度の違いはあるが30~40の方言があると考えられる。本稿では、このうち、2011年9月に調査を実施した上地、与那覇、久貝、伊良部、保良、国仲、大浦、島尻、来間、池間、狩俣、砂川、野原の13地点からのデータを中心として、宮古諸方言の音韻を歴史言語学上の音対応に基づいて整理し、その全体像を示す。従来、音対応というと、日本（古）語との対応の考察が主になっているが、ここでは必ずしも日琉祖語まで遡るわけではなく、主に方言間の比較のための宮古祖語の段階における対応関係を見る<sup>1</sup>。（特に指定されていない場合、祖形の標識である\*は宮古祖形を示している。）

宮古諸方言の音韻についての先行研究としては、平山・大島・中本(1967), 中本(1976), 平山(編)(1983), 名嘉真(1992)などに、各地の音素や音韻の特徴がまとめられている。最近でも、中本(2000), 仲原(2002), 下地(2003), かりまた(2005), Shimoji(2008, 2011), Pellard(2009, 2011), Hayashi(2011)など、個別の方言の音韻体系の調査・研究も進められており、各地の音韻が明らかにされつつあるが、宮古諸方言の音韻の解釈については研究者ごとに大きく異なっている。宮古諸方言には、子音的噪音が自由変異として現れる母音や、特定の母音の存在を音声・音韻的に認めることが困難な音節が存在し、その音価や音韻的解釈を巡ってさまざまな議論がなされている。この議論の中心にあるのが、中舌母音もしくは舌先（尖）母音と呼ばれたり、[s~z]の音価を持つ成節子音として分析されることもある、子音的要素と母音的要素の両方をあわせもつ音素である。このほかに、vやr([l])が成拍的になりえること、また音声的にも広母音であっても無声化しやすいという性質などがあり、（少なくとも音声上の）音節の中核を子音的要素が占めることが多く、「子音性が強い」（沢木2000）方言群とされる。これらを含めた音韻解釈に関する問題は、北村(1960), かりまた(1986, 1987), 加治工(1989), 沢木(2000)などでも考察されているが、未だ多くの課題がある。この問題の多くには、子音と母音のあり方が日本語などと大きく異なるため、どのような分析の枠組みを用いるのかの違いに由来した意見の相違も含まれていると考えられる。本稿で扱えるのはこの問題のごく一部であるが、研究史上で詳細に議論さ

<sup>1</sup> 宮古祖語の再建形についてはPellard(2009), 琉球祖語の再建形についてはThorpe(1983)を基にしている。

れることの少なかった形態音韻現象について考察を加え、宮古諸方言の音韻特徴の一端を示したい。

上述の問題に対する議論も含めつつ、本稿では、宮古祖語で想定される各音素が各地でどのように現れているのかを見ることにより、宮古諸方言としての共通点と方言間の相違点をまとめる。また、ここでの表記は簡易音声表記であり、表中のデータにはそれぞれの調査者によるものを用いた<sup>2</sup>。本稿で扱うのは分節音のみであり、アクセントなどの音調は考慮しないため、データ中に音調上の特徴が記録してあっても、それは本稿中には含めていない<sup>3</sup>。

## 2 母音

### 2. 1 母音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各母音音素ごとに、調査により得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の母音の種類は、/a, e, i, o, u, ɿ/ の 6 種類である。これらは長短の区別をもつが、/e, o/ については母音連續から変化したものであり、借用語をのぞいて基本的に長母音のみである。また、本稿の対象方言にはないが、これに加えて多良間方言には /ë:, ü:/ が認められる（下地 2003 など）<sup>4</sup>。調査対象となっていた方言のうちでは、/a, i, u, ɿ/ の 4 つの母音を持つもの、/a, i, o, u, ɿ/ の 5 つのもの、/a, e, i, o, u, ɿ/ のものがある。また、/ɿ/ は、中国語やバンツー諸語にみられるような fricative vowel といえる (Ladefoged and Maddieson 1996) 音素であり、子音的噪音を持ち合わせた母音である。なお、本稿では母音としているが、子音ととらえる解釈も存在する。

#### 2. 1. 1 広母音

/a/ 非円唇広母音 [a]～[a] < \*a

宮古祖語の \*a にあたる音で、各方言で [a]～[a] で現れる<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> 一度の調査で主に一人の話者から得られた発話の音声的表記である性質上、誤記と思われるものも存在する。解釈にあたっては、著者の知識の範囲内で修正したものもあるが、その場合は都度明示している。

<sup>3</sup> 音調については、五十嵐ほか (2012) などによって、これまで 2 型とされてきた池間方言が 3 型であることが示されるなどの研究の進展がある。

<sup>4</sup> さらに、大神方言には \*ɿ を由来としつつも摩擦音を伴わない /w/ も存在し、また母音体系も他方言と異なり /a, ε, i, u, w/ となっている (Pellard 2009)。

<sup>5</sup> 後述するように、方言によってはこれに対応する音が /u/ で現れる場合があるが、体系的な音変化の結果ではない。

表1 非円唇広母音

	A-187 あそこ	A-062 蚊	A-174 砂	B-060 羽	B-002 歯
上地	kama	gaðam	m̥nagu		pa:
与那覇	k <sup>h</sup> ama	gaðam	nnagu:		
久貝	k <sup>h</sup> ama	gaðam	m̥nagu		
伊良部	k <sup>h</sup> ama	gaðam	mnagu	pani	pa:
保良	k <sup>h</sup> ama	ga <sup>d</sup> zam	nnagu:	p <sup>h</sup> ani	p <sup>h</sup> a:
国仲	kama	kadam	m̥nagu		
大浦	k <sup>h</sup> ama	ga <sup>d</sup> zaŋ	nnagu	pani	pa:
島尻	kama	gadaŋ	nnagu	p <sup>h</sup> ani	p <sup>h</sup> a:
来間	kama	gaðam	m̥:nagu		
池間	kama	kaðaŋ	nnagu	hani	ha:
狩俣	kama	ga <sup>d</sup> zaŋ	nnagu	pani	pa
砂川	k <sup>h</sup> aq <sup>h</sup> ma:	gaðam	nnagu		
野原				pani	pa:

## 2. 1. 2 狹母音

/i/ 非円唇前舌狭母音 [i]～[I] < 宮 \*i

宮古祖語\*iに対応する音で、各地で [i]～[I] で現れる。狩俣では、\*i が /ɿ/ に対応している語がある。池間では、宮古祖語\*ɿ が /ts/, /z/, /s/ の後を除き /i/ と合流している (/ɿ/ の項目で後述)。また、伊良部においては、宮古祖語で \*(C)ja にあたる音が ii に変化している語がある。

表2 狹母音

	A-170 海	A-059 女	A-129 風	B-093 籠	A-110 木
上地	im	midum	kaði		ki:
与那覇	im	midum <u>u</u>	k <sup>h</sup> adzi		ki:
久貝	im	midum	k <sup>h</sup> adzi		ki:
伊良部	im	midum	k <sup>h</sup> adzi	pira	k <sup>h</sup> i:
保良	im	midum	k <sup>h</sup> a <sup>d</sup> zi	p <sup>h</sup> ira	k <sup>h</sup> i:

国仲	im	midum	kadži		ki·
大浦	iŋ	miduŋ	k <sup>h</sup> adži	pira	k <sup>h</sup> i:
島尻	iŋ	miduŋ	k <sup>h</sup> adži	pira	ki:
来間	im	midumu	k <sup>h</sup> adži		ki:
池間	iŋ	miduŋ	k <sup>h</sup> adi	hira	ki:
狩俣	iŋ	miduŋ	k <sup>h</sup> adži	pira	ki:
砂川		midum	kadži		ki: ~ ki:
野原				pira	

表 3 i の一部が ɿ に対応：狩俣

	A-016	A-103
	髭・毛	にんにく
上地	p <sup>h</sup> igi	p <sup>h</sup> il
与那覇	p <sup>z</sup> igi	p <sup>h</sup> i <sup>z</sup> ɿ
久貝	psgi	p <sup>h</sup> iz
伊良部	p <sup>z</sup> igi / f <sup>z</sup> ts <sup>z</sup> p <sup>z</sup> igi	p <sup>h</sup> iɿ
保良	p <sup>z</sup> igi	p <sup>h</sup> i <sup>z</sup> ɿ
国仲	p <sup>h</sup> igi	p <sup>h</sup> il
大浦	p <sup>z</sup> igi ~ p <sub>o</sub> igi	p <sup>h</sup> iɿ
島尻	b <sup>z</sup> igi	p <sup>h</sup> i <sup>z</sup> ɿ
来間	psgi	piz
池間	higi	hi:
狩俣	bzgwa ~ bzgi ~ bigi	p <sup>z</sup> i:
砂川	psgi ~ p <sup>z</sup> ogi	piz ~ pi <sub>o</sub> z
野原		

表 4 \*(C)ja&gt;ii : 伊良部

	A-165	A-189	B-029
	昔	ない	一人
上地	ŋkja:ŋ		
与那覇	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ		tɔv <sup>k</sup> a:
久貝	ŋkja:ŋ	n <sup>j</sup> a:ŋ	tafke:

伊良部	mki:ŋ	ni:ŋ	tavki:
保良	ŋk'ja:ŋ	n'ja:ŋ	tavk'ja:
国仲	ŋkja:ŋ		taŋk'ja:
大浦	ŋk'ja:ŋ		tavk'ja:
島尻	ŋkja:ŋ		tʰafkja:
来間	ŋkja:ŋ	n'ja:ŋ	
池間	ŋk'ja:ŋ	n'ja:ŋ	tau ka:
狩俣	ikja:ŋ	n'ja:ŋ	taɸk'ja:
砂川	ŋkja:ŋ		tavk'ja:
野原			tavkja:

/u/ 円唇後舌狭（緩み）母音[u]～[v] < 宮\*u

宮古祖語 \*u に対応する音で、各地で[u]～[v]で現れる。また、各地でこれに対応する音が a で現れている語が散見されるが、規則的な対応ではない。

表 5 円唇後舌狭母音

	A-028	A-030	A-060	A-071	B-069
	骨	心臓・肝	人	馬	穂
上地	puni	kçimu ~ kimu	pisu	nu:ma	
与那覇	puni	k <sup>s</sup> lmu	p <sup>s</sup> l <sup>t</sup> hu	nu:ma	
久貝	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> zimu	pstu	nu:ma	
伊良部	p <sup>h</sup> uni	tslmu	pstu	nu:ma	pu:
保良	p <sup>h</sup> uni ~ puni	k <sup>s</sup> lmu	pstu	nu:ma	p <sup>h</sup> u:
国仲	puni	tsimu	p <sup>h</sup> itu	n <sup>u</sup> :ma	
大浦	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> lmu	pstu	numa	p <sup>h</sup> u:
島尻	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> lmu	ttu	nu:ma	pu:
来間	p <sup>h</sup> uni	tsimu	pstu	nu:ma	
池間	huni	tsimu	p <sup>h</sup> itu ~ çtu ~ çto	nu:ma	hu:
狩俣	p <sup>h</sup> uni	k <sup>s</sup> imu	pstu	nu:ma	pu:
砂川	p <sup>h</sup> uni ~ p <sup>h</sup> uni	ksmu ~ k <sup>s</sup> lmu	pstu ~ pstu <sub>ø</sub>	nu:ma <sub>ø</sub>	
野原					pu:

表 6 u : a の不規則的な対応の例

	A-132	A-032	A-079	A-115
	雲	膝	卵	福木
上地	kumu	tsigusi	tunaka	pukukugi
与那霸	fum	tsłgusł	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> ukugi:
久貝	fumu	tsīgusi	tunak <sup>h</sup> a	p <sup>h</sup> ukadzgi:
伊良部	fumu	tsłgusł	(k <sup>h</sup> u:ga)	kuputsłgi
保良	fumo	tsłgusł	t <sup>h</sup> unaka	f <sup>h</sup> ukokłgi:
国仲	fumu	tsigusi	tunuka	pukutsigī
大浦	k <sup>h</sup> umu	sugasł	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> ukagi
島尻	fuma	tugusł ~ tugasł	t <sup>h</sup> unaka	k <sup>h</sup> upag <sup>z</sup> łgi:
来間	fumu	tsīgusi	t <sup>h</sup> unuka	pukutsigī:
池間	mumu	sīgusi	tunuka	kutsigī
狩俣	fumu	tsīgasī	tunuga	p <sup>h</sup> ukagagi:
砂川	ɸ <sup>h</sup> umu	ts <sup>h</sup> gusł ~ tsłgusł	t <sup>h</sup> naka	p <sup>h</sup> ukukuki: ~ p <sup>h</sup> ukukugi
野原				

## 2. 1. 3 半狭母音と二重母音

宮古諸方言における半狭母音は、主に母音の融合に由来している。*/e/* については \*ai や \*Cja, */u/* については \*au や \*ua がその由来である。ただし、\*au < o: 以外の変化については、必ずしも一方言内の同一環境内全てで起こっている訳ではない場合がほとんどで、例外も多い。

*/e/* 非円唇前舌半狭母音

*/e/* については、以下の二つの由来がある：

- \*ai : 一部の語彙に見られる
- \*Cja : -i で終わる単語の主題形から変化したものの例が中心

この融合の結果生じる */e/* については、現れない方言の方が多い。なお、下記のデータには*/i/* [i] の誤記例もある。

表7 \*ai 由来の /e/ : 与那覇, 久貝, 来間の一部の語彙

(\*ai > e の変化を受けていない語彙も参考にあげている)

	A-131	A-146	A-157	A-004	も	へ
	地震	南	夜	額		
上地	nai	p <sup>h</sup> ai				
与那覇	nai	pai	junai		mai / me:	ŋkai / ŋke:
久貝	nai	p <sup>h</sup> ai	jun <sup>h</sup> a:iŋ / june:	ftai	mai	ŋkai
伊良部	nai	p <sup>h</sup> ai	ju <sup>z</sup> ŋna <sup>z</sup> ŋ	f <sup>h</sup> tai	mai	
保良	nai	p <sup>h</sup> ai	junai	f <sup>h</sup> tai	mai	ŋkai
国仲	nai	paibara	j <sup>h</sup> unai	f <sup>h</sup> tai	mai	ŋkai
大浦	nai	p <sup>h</sup> ai		f <sup>h</sup> tai ~ ftai		
島尻	nai	p <sup>h</sup> ai				
来間	nai	p <sup>h</sup> ai	june:	fte:	me:	ŋke:
池間	nai	haibara		ftai	mai	ŋkai
狩俣	naw	p <sup>h</sup> ai		ftai	mai	ŋgai
砂川	nai	p <sup>h</sup> ai	junai		mai	ŋkai
野原						ŋkai

表8 \*Cja 由来の /e/ : 久貝の一部の語彙のみ

	A-165	A-189	B-029	
	昔	ない	一人	-i + は
上地	ŋkja:iŋ			
与那覇	ŋk <sup>h</sup> ja:iŋ		tɔv <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	ja:
久貝	ŋkja:iŋ	n <sup>h</sup> a:iŋ	t <sup>h</sup> afke:	e:
伊良部	mki:iŋ	ni:iŋ	tavki:	
保良	ŋk <sup>h</sup> ja:iŋ	n <sup>h</sup> a:iŋ	tav <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	ja:
国仲	ŋkja:iŋ		ta <sup>h</sup> v <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	ja:
大浦	ŋk <sup>h</sup> ja:iŋ		tav <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	
島尻	ŋkja:iŋ		t <sup>h</sup> afkja:	
来間	ŋkja:iŋ	n <sup>h</sup> a:iŋ		ja:
池間	ŋk <sup>h</sup> ja:iŋ	n <sup>h</sup> a:iŋ	tau <sup>h</sup> ka:	(j)a:
狩俣	ikja:iŋ	n <sup>h</sup> a:iŋ	ta <sup>h</sup> Φk <sup>h</sup> a:	ja:
砂川	ŋkja:iŋ		tav <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	ja:
野原			tav <sup>h</sup> kja:	

/o/ 円唇後舌半狭母音[o]

/o/ には以下の二つの由来がある：

- \*au：特に-aで終わる単語の対格形に多く見られる
- \*ua：-uで終わる単語の主題形のみに見られると考えられる

\*au 由来のものについては安定して /o/ で現れる方言が多いが、他の例と同じように語彙によって異なる方言もある（保良、来間）。なお、下記の例には /u/ [u] の誤記例もある。

表 9 \*au 由来の /o/：上地、与那覇、久貝、保良、大浦、来間、狩俣

\*ua 由来の /o/：久貝、国仲、来間、狩俣、砂川

A-027	A-093	A-130	A-136	A-183	-a + を	-u + は
痒い	食べる	竜巻	青い	門		
上地	fo:	amaino <u>ň</u>	o:	đo:		
与那覇	fo:	amaino:	o:nu	đo:	o:	a:
久貝	k <sup>h</sup> o:munu	fo:	ama.ino:	o:	đo:	o:
伊良部	k <sup>h</sup> o:munu	fo:	amaino:	o:	đo:vts̥l	
保良	k <sup>h</sup> a <u>ukau</u>	fau	amaino:	au <u>au</u>	đo: (保良) / đau (新城)	au
国仲	ka <u>m<td>fau</td><td>amainau</td><td>aň</td><td>da<u>u</u></td><td>ao</td></u>	fau	amainau	aň	da <u>u</u>	ao
大浦		fo:	amaino:	o:o:	đo:futs̥l	
島尻		fau	amaino:	aukaŋ	dau	
来間	ko?oko:		ama.ino:	au	đo:	a: / o: / au
池間	kaumunu		amaunau	aumunu	đau	au
狩俣	ko:gaŋ		ino:	o:	đo:	au / o:
砂川		fau ~ fa <u>u</u>	amainau	au ~ au	đau	au
野原						o:

2. 1. 4 特殊母音 /ŋ/

宮古祖語 \*ŋ に対応する音で、前より中舌狭母音[i]～非円唇後舌狭母音[u]の音色に加え、歯茎の摩擦噪音をもつ、いわゆる fricative vowel (摩擦母音) に類する母音である<sup>6・7</sup>。頭

<sup>6</sup> \*ŋ に対応する音価については、長年その調音特徴を元にこれがどんな母音であるかという議論が続いていた（詳細はかりまた 1986 を参照）。ネフスキによる宮古調査以来、中舌母音とするのが主流であったが、崎山(1963, 1965) や上村 (1997) かりまた (1996, 2005) などでは、これが調音音声学的に舌先（尖）母音であると主張している。近年、一部の方言については、それが中舌母音的音色をもち（大野ほか 2000, 青井 2010）かつ s～z に近い位置での調音もなされており（青井 2010），中舌母音と舌先母音両方の性質を持っていることが、機器分析・実

子音が無声子音の場合はその噪音も無声 [s] となり（例：上地「髭」*p<sup>č</sup>igi*），頭子音が有声もしくは頭子音を持たない場合は有声 [z] で現れる（例：与那覇「脚」*p<sup>h</sup>ag<sup>z</sup>₁*）。特に無声子音に挟まれた場合は母音自体が完全に無声化することがほとんどである（例：保良「光」*pska₁*）。逆に、特に頭子音がない場合や有声の頭子音があっても語末などでは、摩擦噪音が弱く、より接近音ないし母音に近い異音が実現する（例：上地「脚」*pagi*）。狭めの程度については方言ごとの違いが予測されるほか、個人間、また同一個人の同一単語でもゆれがみられる（例：大浦「脚」*p<sup>h</sup>ag₁* ~ *p<sup>h</sup>ag<sup>z</sup>₁*）。また、方言によっては、側面音にも聞こえるものがある（例：上地「椀」*mak<sup>χ</sup>al*）。

なお、この母音がもてる頭子音はほかの母音より限られており、方言にもよるが最大で /p, b, k, g, ts, s, z, f, m/ である。池間では特に少なく、/ts/, /s/, /z/ の後ろ以外では /i/ に変化している。その他特筆すべきこととして、/m/ などの後ろでは [i₁] のような二重母音に変化している方言が多いこともあげられる。

また、/γ/ は [z] ないし [s] で現れる場合もあることから、成節的な子音として解釈されることもある。例えば、「人」[pstu] の音韻表記のバリエーションの例としては、*p̄itu* ~ *p̄tu* ~ *p̄žtu* などがある<sup>8</sup>。このように音韻解釈はさまざまだが、これを母音と見た場合でも、摩擦噪音をもつという点についてはそれぞれの研究者の観察は一致しており、また子音として見た場合は、母音のように音節主音にもなれる機能を持たせている。どちらにしても、子音的な性質と母音的な性質の両方をもった音素を想定することになる<sup>9</sup>。

表 10 特殊母音

	A-016 髭・毛	A-025 血	A-100 椀	A-087 (ウニなどの) 肉・身	A-081 魚	A-033 脚	B-062 蠅
上地	<i>p<sup>č</sup>igi</i>	<i>ax<sup>č</sup>atsi</i> ~ <i>ak<sup>č</sup>atsi</i>	<i>mak<sup>χ</sup>al</i>	<i>mi:</i>	<i>i<sup>z</sup>zu</i>	<i>pagi</i>	
与那覇	<i>p<sup>z</sup>gi</i>	<i>ak<sup>h</sup>atsi</i>	<i>mak<sup>h</sup>a<sup>z</sup>₁</i>	<i>m<sup>z</sup>γ:</i>	<i>zzu</i> ~ <i>γzu</i>	<i>p<sup>h</sup>ag<sup>z</sup>₁</i>	
久貝	<i>psgi</i>	<i>akatsi</i>	<i>mak<sup>h</sup>az<sup>i</sup></i>	<i>kaða<sup>t</sup>sanumiz</i>	<i>zzu</i>	<i>p<sup>h</sup>ad<sup>z</sup>₁</i>	
伊良部	<i>p<sup>s</sup>gi</i>	<i>ax<sup>č</sup>atsi</i> ~ <i>ahatsi</i>	<i>maxa<sup>l</sup></i> ~ <i>maha<sup>l</sup></i>	<i>mi<sup>l</sup></i>	<i>z<sup>l</sup>zu</i>	<i>p<sup>h</sup>ad<sup>z</sup>₁</i>	<i>paz</i>
保良	<i>p<sup>z</sup>gi</i>	<i>ak<sup>h</sup>atsi</i>	<i>maka<sup>z</sup>₁</i>	<i>m<sup>z</sup>γ:</i>	<i>zzu</i> ~ <i>z<sup>z</sup>u</i>	<i>p<sup>h</sup>a<sup>d</sup>z<sup>l</sup> ~</i> <i>p<sup>h</sup>ag<sup>z</sup>₁</i>	<i>paz</i> ~ <i>paiz</i>

験により確認されている。これは、他言語での *fricative vowel* が母音的要素と子音的要素の二重調音的性格を持っているという報告とも並行するものである。

<sup>7</sup> 脚注 4 でも述べたように、大神方言には摩擦噪音なしの /u/ が存在し (\*<sub>1</sub> 由来)，無声子音を頭子音にとっても無声化しない。（例：大神「字」[k<sup>w</sup>u:]）（Pellard 2009）

<sup>8</sup> かりまた 2005 では、頭子音となる s や z の異音とする解釈の可能性も考察されている。

<sup>9</sup> 本稿ではこれを母音としているが、音韻記号として /i/ でなく /γ/ を用いる理由として、この音素の大きな特徴である摩擦性を含意して用いられているということがあげられる。

国仲	p <sup>h</sup> igi	ak <sup>χ</sup> atsi	makal	tsimu(ウニ)	( <sup>i</sup> )zzi:	pazi
大浦	p <sup>s</sup> igi ~ p <sup>l</sup> gi	ha:tsi	maka <sup>l</sup>	mi <sup>l</sup>	izu	p <sup>h</sup> agi ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i
島尻	b <sup>z</sup> gi	aχatsi	maχa <sup>l</sup> ~ maχa <sup>z</sup> i	mi <sup>z</sup> i	zzi	p <sup>h</sup> agi ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i
来間	psgi	A: akatsi / B: a <sup>k</sup> xatsi	A: makal / B: makaz	mi: <sup>z</sup>	zzi	p <sup>h</sup> adzi
池間	higi	akatsi	makai	mi:	zzi ~ du	hadzi
狩俣	bzgi ~ bzgi ~ bigi	ha:tsi	ma:u	mi: <sup>z</sup>	izu	p <sup>h</sup> agi ~ p <sup>h</sup> au
砂川	psgi ~ p <sup>s</sup> gi	akatsi	makaz	mz:	zzi	pagz
野原						pagi
						pa <sup>z</sup> i

この母音に関しては調音特徴上の（音声学的）問題が長く議論されてきたが、これについては本稿では詳しく取り扱わない（脚注 6 を参照）。ここでは、この母音と深く関係した形態音韻論上の問題をとりあげ、宮古諸方言のもつ音韻解釈の問題について述べる。

### 母音があるのかないのか

宮古諸方言においてしばしば母音の有無が問題になる音節があるが、それは主にこの特殊母音が摩擦音・破擦音を頭子音に持った場合である。例えば、「牛」[usi] の s は母音を伴って usi や usi と解釈されたり、成節子音として us と解釈されたりする。音声的には、この第 2 音節目は必ず無声で現れるというわけではない<sup>10</sup>、このように解釈されるのには、主に形態音韻論上の現象に理由があると考えられる。

「音素があるか、ないか、子音なのか母音なのか」という問題は、それぞれの方言ごとに音韻システム全体を考慮して決定されるべき問題である。しかし、関連する音韻現象を包括的に考慮している研究は多くはない。本稿で方言ごとの問題全体を解決する議論をすることはできないが、ここではひとまず、母音の有無についての議論でしばしばとりあげられる形態音韻現象をの一つをとりあげ、問題解決にあたり考慮すべき点について考察する。また、これは未解決の問題であることもあり、本稿がとる表記・解釈は、宮古祖形に近い形をとり、成節子音かどうかはつきりしないものには母音を補った形で書く。

<sup>10</sup> 音声的に母音を挿入するという場合もあるので、このこと自体がただちに音韻的に母音があることを示すわけではない。

## 名詞形態音韻論

問題となる音節の解釈に最も深く関わっていると考えられるのが、以下に説明する名詞形態音韻論上の現象である。宮古諸方言において、名詞の主題形、対格形は、付加される語の語末音の性質により以下のように異なった形で現れる。表11は、狩俣の例である。

表11 狩俣方言における語末の音節の種類と主題形、対格形<sup>11</sup>

(-- 部分は未調査)

語末の音節の種類		主題形（～は）	対格形（～を）
C	海 im	imma	immu
	犬 in	inna	innu
	蛇 pav	pavva	pavvu
(C)V[ + 摩擦音]	牛 usɿ	ussa	ussu
	妻 tuzɿ <sup>12</sup>	tuttsa	tuttsu
	道 ntsɿ	nttsa	nttsu
	豆腐 toofu	tooffa	tooffu
	-pɿ	--	--
CV	紙 kabɿ	kabzza	kabzzu
	月 tsɿkɿ <sup>13</sup>	tsɿkssa	tsɿkssu
	脚 pagɿ	pagzza	pagzzu
	米 maɿ	mazza	mazzu
	傘 sana	sanaa	sanau
CV	酒 saki	sakjaa	sakjuu
	蛸 taku	takoo	takuu
	木 kii	kiija	kiiju
(C)VV	声 kui	kuija	kuiju
	字 zɿjɿ	zɿjja	zɿjju
	屁 pɿl	--	--
	芋 mm	mma	mmu

表11で問題とするのは、語末が C もしくは (C)V[ + 摩擦音] (ɿ もしくは 摩擦化した u) で終る場合に、子音重複がみられることがある。ここでは、共時的解釈について検討する前に、まずこのような形が歴史的にどのように発生したかを簡単に見ておきたい。

<sup>11</sup> 表11のデータは、国語研の調査からのものに、著者個人の持つデータを補ったものである。表記は著者により変えている。

<sup>12</sup> 重子音となれる音の制限のために、無声であらわれていると考えられる。

<sup>13</sup> 国語研調査では tskssu の形でているが、この形も存在する。

かりまた (1996, 2007) などでも述べられているように、宮古諸方言においては、特殊母音  $\gamma$  に後続する半母音 w, j や流音 r が摩擦音 s, z になるという歴史変化が起っている<sup>14</sup>。

(1) は、かりまた (2007) からの例を表記をかえて用いたものである。

(1) 「月」 ts $\gamma$ kssu < \*ts $\gamma$ k $\gamma$ ju (「つくよ (月夜)」に由来)

「魚」 zzu < \* $\gamma$ wu (「いを」に由来)

「白」 ssu < \*s $\gamma$ ru (「しろ」に由来)

主題標識、対格標識の宮古祖語における形式はそれぞれ \*ja, \*ju と考えられ、これらが \* $\gamma$  でおわる語に接続した場合においても、これと同様の変化が起っている。

(2) 「髪を」 kab $\gamma$  + ju > kab $\gamma$ =zu [kabzzu] (表 11 より)

表 11 にあるように、子音終わりの語においてもその子音が接続した j を同化するという変化が起っている (「海」 im の対格形 : im=mu)。ここでは変化のプロセスについて詳細な議論は行わないが、同様に  $\gamma$  終わりの語においても、この母音の持つ子音的要素が後続する j を同化したという現象だと捉えることができるだろう<sup>15</sup>。

ただし、表 11 で語末が (C)V[+摩擦音] としたもののうち、s $\gamma$ , z $\gamma$ , ts $\gamma$ , fu<sup>16</sup> については、大きく分けて 2 種類の解釈がある。それは、これらを b $\gamma$ , (p $\gamma$ ), k $\gamma$ , g $\gamma$ , m $\gamma$  終わりの語と同様に音節核となる  $\gamma$  (f の場合は摩擦化した u) をもつとし、母音が j を摩擦音にする規則を想定するか<sup>17</sup>、母音が脱落し成節子音となった s, z, ts, f が、m, n, v と同様に直接 j を同化したとみるかである。

<sup>14</sup> このように摩擦母音が後続する子音に影響を与えることは、バンツー諸語の一部にも見られるものである (Ladefoged and Maddieson 1996)。

<sup>15</sup> かりまた (1996, 2007) では空気力学的観点からこの変化の原因を考察しているほか、青井 (2012) では、この変化のプロセスについて、自律分節音韻論的分析 (autosegmental phonology) により、/γ/ の舌先性が拡張することによって半母音や流音が摩擦化したと説明している。

<sup>16</sup> fu は琉球祖語の \*ku, \*pu に由来している。これを f と捉えるかりまた (2007) によれば、「\*u から変化した v が先行子音 \*p, \*k を調音位置 (唇歯)、調音方法 (摩擦音) に変化を生じさせ、逆に、\*p, \*k は、後続の v を無声化させるという相互同化によって、f に融合したとかんがえる (p.44)」としている。しかし、u の異音として v を残し /fu/ [fv] と解釈することも可能であり、その場合は特殊母音  $\gamma$  と同様に摩擦母音として、その唇歯での摩擦により j が同化したとできる。

また、fu (あるいは f) が後続する子音を同化して生じた重子音を持つ語例は、他にも多くある。

例) 「黒」 ffu < furu (「黒」に由来)

「枕」 maffa < mafura (「枕」に由来)

<sup>17</sup> C\* $\gamma$  (C: 破擦音) に \*ju が後続する場合はさらに同化が起り、例えば \*ts $\gamma$  に \*ju が接続した場合には、ts $\gamma$  + ju > ts $\gamma$ su > ttsu となる。(歴史変化の例.伊良部「月」 ts $\gamma$ k $\gamma$ ju > ts $\gamma$ ts $\gamma$ ju > ts $\gamma$ ttsu)

これはそのまま共時的な分析の問題にも繋がっている<sup>18</sup>。表11の主題形、対格形において子音が重複してあらわれる、語末Cおよび語末(C)V[+摩擦音]の語については、自身とは別に音節核(l)を必要とするp, b, k, g, mのグループ(グループAとする)と、単独の成節子音として見ることができるm, n, v(グループBとする)<sup>19</sup>があり、s, z, ts, fをA, Bのどちらのグループにいれるのかが解釈の上で最も大きな問題となる。その理由は、s, z, ts, fという成節子音を認めるかどうかという、音素配列や音節構造、音素のクラス分けという、一言語の音韻システムにとって極めて大きな問題に繋がっているためである。そして、このs, z, ts, fを成節子音と同じグループにいれるということが、冒頭で述べた「牛」usの2音節目には母音がないとする態度をとることである。大まかに言えば、表11の音韻現象をできるだけ統一的に解釈するための方法は、以下の2通りである<sup>20</sup>。

1. s, z, ts, fはグループAの子音と同様、音節核(lなど)を自身以外にもつ(成節子音として認めない)
2. s, z, ts, fはグループBの子音と同様音節核を必要とせず成節子音となれる

音韻解釈にこの形態音韻論の問題を考慮する・しないにかかわらず、これまでの主流は1のように祖形における\*l(およびu)をそのまま残す解釈である。2に類する研究には、かりまた(2005), Shimoji(2008, 2011), Pellard(2009, 2011)などがある。どちらが妥当な説明となるかについては、各方言ごとの音韻システム(音素体系、音素配列論、音節構造、形態音韻論)の全体を見なければ決定できないものであるが、以下では2をとった場合の利点や、従來說で問題となる点を挙げる。

宮古諸方言の中でも特に特殊な大神方言<sup>21</sup>においては、/m, n, f, s, v/が成節子音であり、ほかの音節核(母音)を伴わず独立しているという根拠が、表11のような名詞形態論以外にも存在する。例えば、大神においては「下」staと「舌」swutaという対立があるが、大神には摩擦を伴わないuのほかに他方言にあるような摩擦母音を設定しなければいけない理由はなく、「下」staのsは母音を伴わない音節とみなせる。鼻音や接近音に加えs, fも成節子音となれるのだが、流音rは頭子音のみで、音節核としては機能しない。これは、流音は類型論的に摩擦音よりも成節的になりやすいとする理論(Zec 2007)の例外となるものだが、このことはこの方言の音節を支える主たる性質が「聞こえ度の高さ」よりも「持続

<sup>18</sup> 以下特に明言はしていないが、共時的な分析においては必ずしも対格標識を祖形と同じjuにする必要はなくuとできると考えられるが、方言によって異なる可能性もある。

<sup>19</sup> 国仲などでは、これにさらに/r/ [ɿ] が音節主音として加わる。

<sup>20</sup> 表11の現象は歴史的変化であり、共時的には単に名詞のパラダイムとして捉えればよいとする考え方もある。これは、共時的な説明項とみなさないということだが、文法に対する態度によっては十分ありうる解釈である。この場合、この形態音韻論上の現象は考慮せずに音素体系・配列や音節構造の整合性と音声事実に従って/l/相当音の解釈を行うことになる。

<sup>21</sup> 有声・無声の対立および破擦音などは持たない。

性」に類するものであることを示していると考えられる<sup>22</sup>。これは宮古諸方言全体にいえる性質である可能性があり、その場合は2の解釈をより宮古諸方言の言語特徴を的確に反映したものとして捉えることができる<sup>23</sup>。

また、母音がないことを示すというわけではないが、s, z, ts, f が音節核を必要とするグループA (p, b, k, g, m) と異なっていることを示すデータが、長浜方言を扱った Shimoji (2008) にも見られる。

(3) a. 長浜「巣」 sii<sup>24</sup> 対格形 sii=u (本稿での解釈・表記の s<sub>11</sub> に対応)  
b. 長浜「日」 pžž 主題形 pžž=ža (本稿での解釈・表記の p<sub>11</sub> に対応)

(Shimoji 2008 より)

このように、(3ab) は従来両者とも特殊母音の長音を持つと解釈されていた語だが、主題形にすると違いが生じてしまう。これは、グループAの子音と s, z, ts, f を均質には扱えないことを示唆するものではあるが、(3a) のような振る舞いは、長音化が可能であるグループBの成節子音とも異なったものである。(グループBの成節子音は長音化でき、例えばそれが主題形になると「芋は」 mm=ma のように子音重複が起る。) この場合、ほかのさまざまな音韻現象を見て、これらをABどちらか近い方と同じ扱いにできるとしても、どちらとも異なる別の規則が必要になる可能性があるだろう。

以上、宮古の名詞形態論を通して、「牛」 uš の2音節目に母音がないとする解釈が生じる形態音韻論上の理由について簡単に述べた。これらの問題は各方言ごとに検討されるべきものであり、例えば池間方言のようにグループAの p, b, k, g, m の全てが頭子音として特殊母音と組み合わさるこがない方言では、事情が大分異なる。

また、ここで見てきたように、宮古祖語では子音もしくは摩擦化した狭母音が後続する半母音 w, j や流音 r を同化するという歴史的変化が起っており、共時的には、そのために生じた子音連続が多く見られるほか、動詞形態論における語幹末子音の重複という形などでも現れる。

(4) 「虱」 ssam < s<sub>1</sub>ram (< 日琉祖語 sirami)  
「作る」語幹 : ts<sub>1</sub>f- 「作らない」 ts<sub>1</sub>f-fan (< 日琉祖語 tsukur-)

<sup>22</sup> 音節核になる音とならない音の違いは持続可能な音か瞬間的な音かの違いであると考えられ、これは Jakobson, Fant & Halle (1952) にみられる *continuant/interrupted* という素性に近い。

<sup>23</sup> 1節で述べた「(少なくとも音声上の) 音節の中核を子音的要素が占めることが多い」のも、この性質と関係したものといえる可能性がある。

<sup>24</sup> Shimoji (2008) においても s, z, ts, f 相当の音は基底で成節子音として扱われており、このiは挿入母音となっている。

このような現象も含め、各方言内でその音韻全体がもっとうまく説明できるシステムの中で、母音の有無も決定されるべきであろう。

以上、特定の音節における母音の有無の問題について、宮古諸方言における名詞形態論をいかに説明するかという観点から簡単に述べた。ここで全ての要素を考察できたわけではなく、詳細はまた稿を改めて議論したい。

## 2. 2 母音体系

以上、宮古諸方言の母音の各音素を見てきたが、母音体系ごとに、以下のようにまとめることができる。

- 4母音体系 : /a, i, u, ɿ/ 池間
- 5母音体系 : /a, i, u, o, ɿ/ 島尻, 伊良部, 砂川, 保良, 野原
- 6母音体系 : /a, i, e, u, o, ɿ/ 来間, 久貝, 狩俣, 大浦, 与那覇

## 3 子音

### 3. 1 子音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各子音音素ごとに、調査より得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の子音の種類は、/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, ɺ, ɺ, h, ɻ, m, n, ɳ, r, j, w/ である。このうち、/v, m, n, r/ については、音節主音になることができ、長子音として単独で語を形成することもある<sup>25</sup>。基本的に有声と無声の対立がある<sup>26</sup>。

#### 3. 1. 1 破裂音

音声的に、語頭では無声子音が帶気化するという特徴がある。

/p/ 無声両唇破裂音

<sup>25</sup>分析によつては、これらに加え、無声摩擦音の/s, f/, さらに破擦音の/ts, z/ も成節子音とする場合がある。詳細は 2.1.4 節を参照。

<sup>26</sup>脚注 21 にもあるように、大神方言のみ、有声無声の対立をもたない。

宮古祖語 \*p に対応する音で、一部の方言では以下のような変化がみられる。

- 池間 : p > h/ [h~ç~ɸ]
- 狩俣, 島尻, 大浦 : p > b/#\_C[ + voiced] (ただし一部の語彙のみ)

表 12 無声両唇破裂音

	A-146 南	A-139 光	A-016 髭・毛	A-148 左	A-033 脚	B-002 歯	B-007 面
上地	p <sup>h</sup> ai	pçkal	p <sup>c</sup> igi	p <sup>h</sup> idal ~ pida	pagi	pa:	
与那霸	pai	p <sup>s</sup> ʒka <sup>z</sup> l	p <sup>z</sup> gi	p <sup>s</sup> ʒda <sup>z</sup> l	p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l		
久貝	p <sup>h</sup> ai	pskaz	psgi	pzdaz	p <sup>h</sup> adz <sup>i</sup>		
伊良部	p <sup>h</sup> ai	p <sup>s</sup> ka <sup>l</sup>	p <sup>s</sup> gi	p <sup>h</sup> idi <sup>l</sup>	p <sup>h</sup> adz <sup>l</sup>	pa:	mipana ~ miɸana
保良	p <sup>h</sup> ai	pska <sup>l</sup>	p <sup>z</sup> gi	p <sup>s</sup> ʒda <sup>l</sup> ~ p <sup>s</sup> ʒda <sup>z</sup> l	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> z <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	p <sup>h</sup> a:	mip <sup>h</sup> ana
国仲	paibara	p <sup>h</sup> ikal	p <sup>h</sup> igi	p <sup>s</sup> idal	pazi		
大浦	p <sup>h</sup> ai	pska <sup>l</sup>	p <sup>s</sup> gi ~ p <sup>z</sup> gi	b <sup>z</sup> lda <sup>l</sup>	p <sup>h</sup> ag <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	pa:	nipana
島尻	p <sup>h</sup> ai	pska <sup>z</sup> l	b <sup>z</sup> gi	b <sup>z</sup> lda <sup>z</sup> l	p <sup>h</sup> ag <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	p <sup>h</sup> a:	mipana
来間	p <sup>h</sup> ai	pskal	psgi	A: p <sup>h</sup> idal / B: psdaz	p <sup>h</sup> adz <sup>i</sup>		
池間	haibara	çikai	higi	çidai	hadz <sup>i</sup>	ha:	mihana
狩俣	p <sup>h</sup> ai	pskaw	bzg <sup>w</sup> ~ bzg <sup>i</sup> ~ bgi	b <sup>z</sup> daw ~ bzdaw	p <sup>h</sup> agw	pa	mipana
砂川	p <sup>h</sup> ai	p <sup>h</sup> skaz <sup>z</sup>	psgi ~ p <sup>z</sup> gi	p <sup>h</sup> sdaz ~ p <sup>h</sup> sdal	pagz <sup>z</sup>		
野原					pagl	pa:	mipana

### /b/ 有声両唇破裂音

宮古祖語 \*b に対応する音で、各地で安定して /b/ で現れる。

表 13 有声両唇破裂音

	A-007 唇	A-051 夫	A-055 子供(未成年)	A-091 砂糖黍	A-156 夕方	A-029 お腹
上地	siba	Bikidum ~ bikidžum	jarabi	bu:g <sup>i</sup>		jusarabi
与那霸	s <sup>z</sup> iba	but <sup>h</sup> u		bu:g <sup>z</sup> l		

久貝	siba	but <sup>h</sup> u	jarabi[新]	bu:g <sup>z</sup> i	jusarabi	bat <sup>h</sup> a
伊良部	s <sup>h</sup> iba	butu	jarabi	bu:d <sup>z</sup> i	jusarabi	bata
保良	s <sup>h</sup> iba	b <sup>h</sup> ut <sup>h</sup> u	jarabi	b <sup>h</sup> u:g <sup>z</sup> i ~ bu:d <sup>z</sup> i	jusarabi	bata
国仲	sibaya	b <sup>h</sup> utu	jarabi	b <sup>h</sup> u:d <sup>z</sup> i		bata
大浦	NR	butu	jarabi	bu:g <sup>z</sup> i ~ bu:g <sup>z</sup> i		
島尻	z <sup>h</sup> iba	butu		bu:g <sup>z</sup> i ~ bu:g <sup>z</sup> i		
来間	siba	bikidumu	jarabi	bu:d <sup>z</sup> i	jusarabi	bata
池間	f <sup>h</sup> utsi	butu	jarabi	bu:d <sup>z</sup> i	jusarabi	bata
狩俣	siba	budu	jarabi	bu:g <sup>z</sup> i	jusarabi	bada
砂川	s <sup>h</sup> ba ~ spa	but <sup>h</sup> u	jarabi	bu:g <sup>z</sup> i		
野原						

## /t/ 無声歯茎破裂音

宮古祖語 \*t に対応する音で、一部の方言で以下の変化が見られる。

- 島尻・国仲 : t > t<sup>h</sup> / \_i
- 狩俣 : t > d / C[+voiced]V\_

表 14 無声歯茎破裂音

	A-077	A-154	A-177	A-018	B-029
	鳥	朝	土	力	一人
上地	tou	sit <sup>h</sup> umuti	mta ~ mt <sup>h</sup> i	taja	
与那覇	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	s <sup>h</sup> it <sup>h</sup> umuti	mt <sup>h</sup> a	t <sup>h</sup> aja	t <sup>h</sup> uk <sup>j</sup> a:
久貝	t <sup>h</sup> uz	stumuti	mta	t <sup>h</sup> aja	t <sup>h</sup> afke:
伊良部	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i ~ t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	stumuti	mta	t <sup>h</sup> aja	tavki:
保良	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	s <sup>h</sup> tumuti	mta	t <sup>h</sup> aja	tavk <sup>j</sup> a:
国仲	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	s <sup>h</sup> it <sup>h</sup> umuti	nta	taja	ta <sup>v</sup> k <sup>j</sup> a:
大浦	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	stumuti	nta	t <sup>h</sup> aja	tavk <sup>j</sup> a:
島尻	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> i	stumat <sup>h</sup> i	nta	t <sup>h</sup> aja	t <sup>h</sup> afkja:
来間	t <sup>h</sup> uz	stumuti	mta	taja	
池間	tui	çitumuti	nta ~ mta	taja	tau <sup>h</sup> uka:
狩俣	tuw	stumuti	nta	taja	ta <sup>h</sup> uk <sup>j</sup> a:
砂川	tuz	stumuti <sup>h</sup> ~ stumuti	mta	taja	tavk <sup>j</sup> a:
野原					tau <sup>h</sup> uka:

表 15 狩俣 : t > d / C [+voiced]V\_の例

A-029		A-051
お腹		夫
上地		bikidum ~ bikidžum
与那霸		but <sup>h</sup> u
久貝	bat <sup>h</sup> a	but <sup>h</sup> u / bikirja[吉]
伊良部	bata	butu
保良	þata	þut <sup>h</sup> u
国仲	bata	b <sup>h</sup> tu
大浦		butu
島尻		butu
来間	bata	bikidumu
池間	bata	butu
狩俣	bada	budu
砂川		but <sup>h</sup> u
野原		

### /d/ 有声歯茎破裂音

宮古祖語 \*d に対応する。島尻で, d > dž / \_i という変化がみられる。

表 16 有声歯茎破裂音

A-005		A-037	A-059	A-111	A-182	A-017
涙		体	女	枝	戸	腕
上地			midum ~ mi <sup>d</sup> ðum	juda		udi
与那霸			midum <u>o</u>	juda		k <sup>h</sup> aina
久貝	nada / mi:nada	du:	midum	juda	jadu	udi / k <sup>h</sup> aina (肩の痛み)
伊良部	nada	up <sup>h</sup> udu:	midum	ida	jadu	k <sup>h</sup> aina
保良	nada	du:	midum	juda	jadu	udi
国仲	nada	du:	midum	juda		udi
大浦	nada		miduŋ	ida		udi
島尻			miduŋ	juda		udži
来間	nada	du:	midumu	ida	jadu	ude

池間	nada	du:	miduŋ	juda	jadu	ti: / 手首 kaina
狩俣	nada	du:	miduŋ	ida	jadu	kaina
砂川			midum	juda		kaina
野原						

### /k/ 無声軟口蓋破裂音

宮古祖語 \*k に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 狩俣: k > g / C[+voiced]V\_ <sup>27</sup>
- 伊良部・国仲・来間・池間: k > ts / \_ 1
- k の弱化:

伊良部: k > h ~ x / a\_a

島尻: k > χ / a\_a

大浦: #aka > #ha:

狩俣: #aka > #ha:, Caka > Ca:

表 17 無声軟口蓋破裂音

	A-126	A-129	A-139	A-164	A-110
	灰	風	光	去年	木
上地	karap <sup>h</sup> aλ ~ karap <sup>h</sup> a <sup>z</sup>	kadzi	pçkal	kuðzu	ki:
与那霸	k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> adzi	p <sup>s</sup> ₁ka <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> udzu	ki:
久貝	k <sup>h</sup> arap <sup>h</sup> az	k <sup>h</sup> adzi	pskaz	kudzu	ki:
伊良部	k <sup>h</sup> ara pa₁	k <sup>h</sup> adzi	p <sup>s</sup> ka₁	k <sup>h</sup> udu	k <sup>h</sup> i:
保良	k <sup>h</sup> arapa₁ ~ k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> a <sup>d</sup> zi	pska₁	k <sup>h</sup> udzu	k <sup>h</sup> i:
国仲	karapal	kadzi	p <sup>h</sup> kal	k <sup>h</sup> udu	ki:
大浦	k <sup>h</sup> arapa₁	k <sup>h</sup> adzi	pska₁	k <sup>h</sup> u <sup>d</sup> zu	k <sup>h</sup> i:
島尻	karapa <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> adzi	pska <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> udu	ki:
来間	A: karabal / B: karabaz	k <sup>h</sup> adzi	pskal	k <sup>h</sup> udzu	ki:
池間	karahai	k <sup>h</sup> adi	çikai	kudzu	ki:
狩俣	karapaš	k <sup>h</sup> adzi	pskaš	kudzu	ki:
砂川	karapaz	kadzi	p <sup>h</sup> ka <sup>z</sup> ₁	k <sup>h</sup> u <sup>d</sup> z u	ki: ~ ki:
野原					

<sup>27</sup> 表 18 にある、島尻「卵」t<sup>h</sup>unaka も、島尻で k > χ / a\_a の変化が起る以前に、この変化を受けていたと考えられる。

表 18 狩俣 : k > g / C[+voiced]V\_\_ の例

	A-072	A-079
	雄山羊	卯
上地		tunaka
与那霸		t <sup>h</sup> unaka
久貝	bikip <sup>h</sup> indza	tunak <sup>h</sup> a
伊良部	bikipindza	k <sup>h</sup> u:ga
保良	bjikipindza	t <sup>h</sup> unaka
国仲	bikipinda	tunuka
大浦		t <sup>h</sup> unaka
島尻		t <sup>h</sup> unasa
来間	bikip <sup>h</sup> indza	t <sup>h</sup> unuka
池間	bikihindza	tunuka
狩俣	bigipindza	tunuga
砂川		t <sup>h</sup> naka
野原		

表 19 伊良部・国仲・来間・池間 : k > ts / \_\_ 1 の例

	A-121	A-163	A-030	A-142
	着物	昨日	心臓・肝	月 (天体・暦)
上地	kij	k <sup>s</sup> inu	kçimu ~ kimu	tsikiju:
与那霸	k <sup>s</sup> lj	k <sup>s</sup> lno	k <sup>s</sup> lmu	ts <sup>h</sup> lk <sup>s</sup> l / ts <sup>h</sup> lk <sup>s</sup> lnoju:
久貝	k <sup>s</sup> ij	ksinu	k <sup>s</sup> zimu	tskssu
伊良部	ts <sup>h</sup> lj	ts <sup>h</sup> nu:	ts <sup>h</sup> mu	ts <sup>h</sup> tsu ~ ts <sup>h</sup> tsu(?)
保良	k <sup>s</sup> lj	k <sup>s</sup> lno:	k <sup>s</sup> lmu	tsk <sup>h</sup> l
国仲	tsij	tsinu	tsimu	ts <sup>h</sup> ittu
大浦	k <sup>s</sup> lj	k <sup>s</sup> lnu	k <sup>s</sup> lmu	tsk <sup>h</sup> l
島尻	k <sup>s</sup> lj	k <sup>s</sup> lnu	k <sup>s</sup> lmu	tsk <sup>h</sup> l ~ tsk <sup>s</sup> l
来間	tsij	tsino	tsimu	A: ts <sup>h</sup> tsi / B: ts <sup>h</sup> tsinuju:
池間	tsij	Nnu	tsimu	ts <sup>h</sup> tsi
狩俣	k <sup>s</sup> ij	ksn <sup>h</sup> u	k <sup>s</sup> imu	tskssu
砂川	k <sup>s</sup> n	ksnu:	ksmu ~ k <sup>s</sup> lmu	tsks
野原				

表 20 k の弱化の例

伊良部 : k > h ~ x / a\_a

島尻 : k > χ / a\_a

大浦 : #aka > #ha:

狩俣 : #aka > #ha:, Caka > Ca:

	A-100	A-025	A-186	A-066	A-178
	椀	血	墓	蟻	庭
上地	mak <sup>χ</sup> al	aχ <sup>χ</sup> atsi ~ ak <sup>χ</sup> atsi	p <sup>χ</sup> aka	ak <sup>χ</sup> a:l	
与那覇	mak <sup>h</sup> a <sup>z</sup> l	ak <sup>h</sup> atsl	p <sup>h</sup> aka	aka: <sup>z</sup> l	
久貝	mak <sup>h</sup> azi	akatsi	p <sup>h</sup> aka	aka: <sup>z</sup>	minaka
伊良部	maxa <sup>χ</sup> l ~ maha <sup>χ</sup> l	ax <sup>χ</sup> atsl ~ ahatsl	p <sup>h</sup> a: ~ p <sup>h</sup> a:	aha:	minaha
保良	maka <sup>z</sup> l	ak <sup>h</sup> atsl	p <sup>h</sup> aka	a <sup>z</sup> l <sup>χ</sup> gara (保良) / ak <sup>h</sup> a: (新城)	minaka
国仲	makal	ak <sup>χ</sup> atsi	p <sup>χ</sup> aka	aka:	
大浦	makal	ha:tsl	p <sup>h</sup> aka	ha: <sup>z</sup> l ~ xa: <sup>z</sup> l	
島尻	maχa <sup>χ</sup> l ~ maχa <sup>z</sup> l	aχatsl	p <sup>χ</sup> aka	aχa <sup>z</sup> l	
来間	A: makal / B: makaz	A: akatsi / B: a <sup>χ</sup> atsi	p <sup>χ</sup> aka	A: aka <sup>χ</sup> / B: akaz	minaka
池間	makai	akatsi	haka	Akai	minaka
狩俣	ma:u	ha:tsi	p <sup>χ</sup> aka	ha:u	a <sup>χ</sup> ra / mina:
砂川	makaz	ak <sup>χ</sup> atsl	p <sup>χ</sup> aka	azgara	
野原					

### /g/ 有声軟口蓋破裂音

宮古祖語 \*g に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / \_ \_ l
- 島尻 : g > ρ / a\_a
- 伊良部 : g > ʃ / a\_a

表 21 有声軟口蓋破裂音

	A-016 髭・毛	A-140 蔭	A-174 砂	A-032 膝	A-062 蚊
上地	p <sup>č</sup> igi	kagi	m <sup>č</sup> nagu	tsigusi	gačam
与那霸	p <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> agi	nnago:	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> l	gačam
久貝	psgi	k <sup>h</sup> agi	m <sup>č</sup> nagu	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> i	gačam
伊良部	p <sup>z</sup> igi / f <sup>z</sup> ts <sup>z</sup> lp <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> a:gi	mnagu	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> l	gačam
保良	p <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> ag	nnago:	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> l	ga <sup>d</sup> zam
国仲	p <sup>h</sup> igi	ka:gi	m <sup>č</sup> nagu	tsigusi	kadam
大浦	p <sup>z</sup> igi ~ p <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> ag	nnagu	sugas <sup>z</sup> l	ga <sup>d</sup> zaj
島尻	b <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> agi	nnagu	tugus <sup>z</sup> l ~ tugas <sup>z</sup> l	gada <sup>z</sup> aj
来間	psg	kagi	m <sup>č</sup> nagu	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> i	gačam
池間	higi	kagi	nnagu	s <sup>z</sup> igus <sup>z</sup> i	kačaj
狩俣	bzgwi ~ bzgi ~ bi <sup>h</sup> gi	kag	nnagu	ts <sup>z</sup> gas <sup>z</sup> i	ga <sup>d</sup> zaj
砂川	psg ~ p <sup>z</sup> igi	k <sup>h</sup> agi ~ kag	ηnagu	ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> l ~ ts <sup>z</sup> gus <sup>z</sup> l	gačam
野原					

表 22 その他 \*g の変化の例

伊良部・国仲・来間・池間 : g &gt; dz / \_ \_ 1

島尻 : g &gt; ㅂ / a\_a

伊良部 : g &gt; ঁ / a\_a

	A-033 脚	A-091 砂糖糀	A-124 鏡	A-143 東
上地	pagi	bu:gi	kagam	aγal
与那霸	p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	bu:g <sup>z</sup> l	k <sup>h</sup> agam	aga <sup>z</sup> l
久貝	p <sup>h</sup> adz <sup>z</sup> i	bu:g <sup>z</sup> i	k <sup>h</sup> agam	a <sup>z</sup> az
伊良部	p <sup>h</sup> adz <sup>z</sup> l	bu:dz <sup>z</sup> l	k <sup>h</sup> a <sup>z</sup> am	a <sup>z</sup> a <sup>z</sup> l
保良	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> z <sup>z</sup> l ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	bu:g <sup>z</sup> l ~ bu:dz <sup>z</sup> l	k <sup>h</sup> agam	aga <sup>z</sup> l
国仲	pazi	b <sup>z</sup> u:dz <sup>z</sup> i	kagam	ag <sup>z</sup> l
大浦	p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	bu:g <sup>z</sup> l ~ bu:g <sup>z</sup> l	k <sup>h</sup> aga <sup>z</sup> l	(aga <sup>z</sup> l ~) a <sup>z</sup> l
島尻	p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> l	bu:g <sup>z</sup> l ~ bu:g <sup>z</sup> l	k <sup>h</sup> a <sup>z</sup> a <sup>z</sup> l	a <sup>z</sup> a <sup>z</sup> l
来間	p <sup>h</sup> adz <sup>z</sup> i	bu:dz <sup>z</sup> i	kagam	A: ag <sup>z</sup> l / B: agaz

池間	hadži	bu:ži	kagaŋ	agai
狩俣	p <sup>h</sup> agw	bu:g̊i	k <sup>h</sup> agaŋ	a:w
砂川	pagz	bu:gz	kagam	agaz
野原	pagl			

### 3. 1. 2 破擦音

#### /ts/ 無声歯茎破擦音

宮古祖語 \*ts に対応する音で、ほとんどが /t/ の前に現れる例である。他の母音の前では、方言によって /t/ で現れる語彙もある（島尻「明日」ata など）。

また、伊良部・国仲・保良・池間では、宮古祖語 \*k<sub>l</sub> が /ts<sub>l</sub>/ に変化している。

表 23 無声歯茎破擦音

	A-031 乳	A-025 血	A-142 月（天体・暦）	A-160 明日	A-101 茶碗
上地	tsi	aχ <sub>ø</sub> tsi ~ ak <sub>ø</sub> tsi	ts <sub>ø</sub> kiju	aça / atç	
与那覇	ts <sub>l</sub> :	ak <sup>h</sup> øts <sub>l</sub>	ts <sub>l</sub> k <sup>s</sup> / ts <sub>l</sub> k <sup>s</sup> nuju:	atsa	
久貝	tsi:	akatsi	tskssu	atssa	tç <sup>h</sup> abaŋ
伊良部	ts <sub>l</sub> :	axøts <sub>l</sub> ~ ahats <sub>l</sub>	ts <sub>ø</sub> tsu ~ ts <sub>ø</sub> tsu(?)	atsa	tçabaŋ
保良	tss <sub>l</sub>	ak <sup>h</sup> øts <sub>l</sub>	tsk <sub>l</sub>	atsa	tçabaŋ
国仲	tsi	ak <sup>h</sup> øtsi	ts <sub>ø</sub> ttu	ata	
大浦	ts <sub>l</sub>	ha:ts <sub>l</sub>	tsk <sub>l</sub>	atsa	
島尻	tss <sub>l</sub>	aχ <sub>ø</sub> ts <sub>l</sub>	tsk <sub>l</sub> ~ ts <sub>l</sub> k <sup>s</sup>	ata	
来間	A: ts <sub>ø</sub> / B: tss <sub>ø</sub>	A: akatsi / B: a <sup>h</sup> øtsi	A: ts <sub>ø</sub> tsi / B: ts <sub>ø</sub> tsinuju:	atça	tçabaŋ
池間	tsi:	akatsi	ts <sub>ø</sub> tsi	atça	tçabaŋ
狩俣	tz <sub>ø</sub> :	ha:tsi	tskssu	atsa	tçabaŋ
砂川	ts <sub>l</sub> :	ak <sub>ø</sub> ts <sub>l</sub>	tsks	ats <sub>ø</sub>	
野原					

表 24 伊良部・国仲・保良・池間 : ts<sub>l</sub> < \*k<sub>l</sub>

	A-030 心臓・肝	A-121 着物	A-009 息
上地	kçimu ~ kimu	kiŋ	

与那覇	$k^s\gamma mu$	$k^s\gamma$	
久貝	$k^s\gamma imu$	$k^s\gamma$	$ik^s\gamma$
伊良部	肝 $ts\gamma mu$	$t^s\gamma$	$its\gamma$
保良	$k^s\gamma mu$	$k^s\gamma$	$ik^s\gamma$
国仲	$tsimu$	$ts\gamma$	$its\gamma$
大浦	$k^s\gamma mu$	$k^s\gamma$	$ik\gamma$
島尻	$k^s\gamma mu$	$k^s\gamma$	
来間	$tsimu$	$ts\gamma$	A: $i^s\gamma$ / B: $its\gamma$
池間	$tsimu$	$ts\gamma$	$iki$
狩俣	$k^s\gamma mu$	$k^s\gamma$	$ik\gamma$
砂川	$ksmu \sim k^s\gamma mu$	$ks\gamma$	
野原			

### 3. 1. 3 摩擦音

/s/

[s]無声歯茎摩擦音

[ç]無声歯茎硬口蓋摩擦音 / \_ i

宮古祖語 \*s に対応する音で、i の前では調音点が口蓋寄りになる。

大浦などでは、以下のように変化している。

- 大浦・島尻 : \*s\gamma > \ \ \ C [+voiced]
- 与那覇・保良・大浦 : \*s > ts / N \_

また、大浦や島尻などで、\*fusV に由来する ssV がある。

表 25 無声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦音

	A-156	A-173	A-032	A-113	A-098	A-007	A-008
	夕方	珊瑚礁	膝	草	味噌	唇	舌
上地	jusarabi	p\c{e}i ~ p\c{e}i	tsigusi	f\c{u}sa	msu	siba	sida
与那覇		\c{e}i: / p\c{h}\c{e}i\c{e}i	ts\gamma us\gamma	fsa	mts\gamma	s\gamma ba	s\gamma da
久貝	jusarabi	p\c{e}ci	ts\gamma us\gamma	fsa	msu	siba	sida
伊良部	jusarabi	p\c{e}ci	ts\gamma us\gamma	f\c{u}sa	msu	s\gamma ba	sta
保良	jusarabi	p\c{e}ci ~ p\c{e}ci	ts\gamma us\gamma	f\c{u}sa	mts\gamma	s\gamma ba	s\gamma da
国仲		p\c{e}ci	tsigusi	f\c{u}sa	\c{e}su	sibaya	s\c{e}ta/sta
大浦		p\c{e}ci	sugas\gamma	ssa	nts\gamma	NR	\c{e}da ~ s\gamma da

島尻		p̥iç̥i	tugus̥l ~ tugas̥l	ssa	nsu	z̥ba	z̥da
来間	jusarabi	p̥ç̥i	ts̥igus̥i	fsa	A: m:su / B: m:so	s̥iba	s̥ida
池間	jusarabi	p̥iç̥i	s̥igus̥i	f̥usa (= [f̥w̥sa])	nsu	f̥uts̥i	cta
狩俣	jusarabi	p̥ç̥ci	ts̥igas̥i	f̥usa	nsu	s̥iba	sta
砂川		p̥iç̥i	ts̥gus̥l ~ ts̥l̥gus̥l	fsa	m̥su ~ m̥s̥u	s̥ba ~ s̥pa	s̥da ~ s̥l̥da / s̥da
野原							

/z/

[z]～[dz]有声歯茎摩擦・破擦音

[z]～[dz]有声歯茎硬口蓋摩擦・破擦音 / \_ i

宮古祖語 \*z に対応する音で、i の前では調音点が口蓋寄りになる。摩擦音もしくは破擦音の自由変異をもつ。

そのほか、方言ごとに以下のような特徴がある。

- 上地・来間：l の前以外では [z]～[dz] で現れる。
- 池間：dza<sup>28</sup> di dzu dzl
- 島尻・国仲：i, l の前以外では /d/ となる。
- 伊良部・国仲・来間・池間では、\*g̥l が /dzl/ に変化している。

表 26 有声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦・破擦音

	A-023	A-164	A-062	A-183	A-129
	肘	去年	蚊	門	風
上地	p̥idz̥i	kuð̥u	gað̥am	d̥o:	kað̥i
与那霸	p̥idz̥l	k̥uð̥u	gað̥am	d̥o:	k̥adz̥i
久貝	p̥idz̥i	kuð̥u	gað̥am	d̥o:	k̥adz̥i
伊良部	p̥idz̥l	k̥udu	gað̥am	d̥o:vts̥l	k̥adz̥i
保良	p̥idz̥l	k̥uð̥u	gað̥am	d̥o: (保良) / d̥au (新城)	k̥að̥zi
国仲	p̥idz̥i	k̥udu	kað̥am	d̥au	kað̥i
大浦	p̥idz̥l	k̥uð̥u	gað̥an̥	d̥o:futs̥l 「入口」	k̥adz̥i
島尻	p̥idz̥l	k̥udu	gað̥an̥	d̥au	k̥adz̥i

<sup>28</sup> 表 26 中のデータでは 池間「門」dzau となっているが、筆者の調査では d̥au となっている。

来間	pidzi	k <sup>h</sup> udžu	gađam	džo:	k <sup>h</sup> adži
池間	hidži	kudžu	kađan	džau	k <sup>h</sup> adi
狩俣	pidži	kudžu	ga <sup>d</sup> zan	džo:	k <sup>h</sup> adži
砂川	p <sup>h</sup> idži ~ pidži	ku <sup>g</sup> džu	gađam	džau	kađi
野原					

表 27 伊良部・国仲・来間・池間 : g &gt; dz / \_ 1

	A-033	A-091	A-118
	脚	砂糖黍	釘
上地	pagi	bu:g <sup>i</sup>	fugi
与那覇	p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i	bu:g <sup>z</sup> i	fug <sup>z</sup> i
久貝	p <sup>h</sup> adži	bu:g <sup>z</sup> i	k <sup>h</sup> anifugz / fugz
伊良部	p <sup>h</sup> adži	bu:dži	fuđi
保良	p <sup>h</sup> a <sup>d</sup> z <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i	bu:g <sup>z</sup> i ~ bu:dži	fug <sup>z</sup> i
国仲	pazi	bu:dži	kanifudži
大浦	p <sup>h</sup> ag <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i	bu:g <sup>l</sup> ~ bu:g <sup>z</sup> i	k <sup>h</sup> anifug <sup>l</sup>
島尻	p <sup>h</sup> ag <sup>l</sup> ~ p <sup>h</sup> ag <sup>z</sup> i	bu:g <sup>l</sup> ~ bu:g <sup>z</sup> i	fug <sup>z</sup> i
来間	p <sup>h</sup> adži	bu:dži	fuđi / k <sup>h</sup> anfuđi
池間	hadži	bu:dži	kanifudži
狩俣	p <sup>h</sup> agw	bu:g <sup>i</sup>	fug <sup>i</sup> ~ fugw
砂川	pagz	bu:g <sup>z</sup>	f <sup>g</sup> z
野原	pag <sup>l</sup>		

## /f/ 無声歯唇歯摩擦音

宮古祖語の \*f に対応しており、基本的に [f] の音価を持つが、まれに無声両唇摩擦音 [ɸ] で現れることがある。また、下記データ中の「雲」における k は、標準語の影響であると考えられる。

また、大浦などでは、\*fusV が ssV に変化している。

表 28 無声歯唇歯摩擦音

	A-094 食べ物	A-172 船	A-132 雲	A-004 額	A-006 口
上地	fa'munu	fun'i	kumu		f <u>ø</u> tsi
与那霸	fo:munu	funi	fum		f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
久貝	fo:munu	funi	fumu	ftai	fts <u>ɻ</u>
伊良部	fa <u>ɻ</u> munu	funi	fumu	f <u>ø</u> tai	f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
保良	faumunu	funi	fumu	f <u>ø</u> tai	f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
国仲	fa <u>ɻ</u> munu	funi	fumu	f <u>ø</u> tai	f <u>ø</u> tsi
大浦	fo:munu	funi	k <sup>h</sup> umu	f <u>ø</u> tai ~ ftai	f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
島尻	faumunu	funi	fuma		fts <u>ɻ</u>
来間	f <u>ø</u> :munu	funi	fumu	ft <u>ɻ</u>	fts <u>ɻ</u>
池間	faimunu	funi	mu	ftai	f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
狩俣	faumunu	funi	fumu	ftai	f <u>ø</u> ts <u>ɻ</u>
砂川	faumunu	f <u>ø</u> nji	f <u>ø</u> mu		fts ~ fts <u>ɻ</u>
野原					

表 29 大浦・島尻 : \*fusV > ssV

	A-113 草	A-003 櫛
上地	f <u>ø</u> sa	fu
与那霸	fsa	f <u>ɻ</u> u
久貝	fsa	fs <u>ɻ</u>
伊良部	f <u>ø</u> sa	f <u>ø</u> s <u>ɻ</u>
保良	f <u>ø</u> sa	f <u>ø</u> s <u>ɻ</u>
国仲	f <u>ɻ</u> a	fsu
大浦	ssa	s: ~ s <u>ɻ</u> :
島尻	ssa	ss <u>ɻ</u>
来間	fsa	f <u>ø</u> s <u>ɻ</u>
池間	f <u>ø</u> sa (= [f <sup>w</sup> sa])	f <u>ø</u> ci
狩俣	f <u>ø</u> sa	f <u>ø</u> s <u>ɻ</u> = f <sup>w</sup> s <u>ɻ</u>
砂川	f <u>ɻ</u> a	f <u>ɻ</u> ~ f <u>ɻ</u> <u>ɻ</u> ~ f <u>ø</u> s <u>ɻ</u>
野原		

/v/

[v] 有声唇歯摩擦音

[v] 有声唇歯接近音

宮古祖語 \*v に対応する音で、頭子音だけでなく音節主音となることができる（池間を除く）。どちらの環境でも、摩擦音と接近音のバリエーションがあり、せばめの度合いが高い方言と低い方言がある。u の後ろでは同化し u となる方言もある（下表「粥」を参照）。また、一部の語彙で方言間で /f/～/v/ の揺れも観察される。

表 30 有声唇歯摩擦音～接近音

	A-035	A-043	A-095	A-096
	脹脛	お前	油	粥
上地		vva		juv
与那覇	k <sup>h</sup> u:va	vva		ju:
久貝	kuvva	vva	avva	juv
伊良部	k <sup>h</sup> uvva	ja:	avva	dzu:ca
保良	kuvva	vva ~ vva	avva ~ avva	juv ~ juv
国仲	k <sup>h</sup> vva	vva	avva	j <sup>h</sup> v
大浦	NR	vva		juv
島尻	kuvva ~ ku <sup>h</sup> vva	vva		juv
来間	kuvva	vva	avva	juv
池間	kuvva	vva	avva	ju:
狩俣	kuvva	vva	avva	N/R
砂川	k <sup>h</sup> vva ~ k <sup>h</sup> vva	vva		juv
野原				

表 31 方言間での /f/～/v/ の揺れ（他方言では /v/ だが上地、久貝、島尻のみ /f/ となる例）

	B-029	A-184/A-149
	一人	前・正面
上地		maf <sup>h</sup> kja:
与那覇	t <sup>h</sup> uk <sup>h</sup> a:	mau <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:
久貝	t <sup>h</sup> afke:	maf <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a ~ maf <sup>h</sup> ik <sup>h</sup> a
伊良部	tavki:	mau <sup>h</sup> kja:
保良	tavk <sup>h</sup> a:	mau <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:
国仲	ta <sup>h</sup> v <sup>h</sup> k <sup>h</sup> a:	mau <sup>h</sup> kja:

---

大浦	tavk <sup>j</sup> a:	
島尻	t <sup>h</sup> afkja:	maf <sup>h</sup> kja:
来間		mo:t <sup>h</sup> u <sup>29</sup>
池間	tau <sup>k</sup> a:	mauk <sup>j</sup> a:
狩俣	ta <sup>k</sup> k <sup>j</sup> a:	maukja: / mafk <sup>j</sup> a
砂川	tavk <sup>j</sup> a:	mav <sup>k</sup> ja: ~ m <sup>h</sup> av <sup>k</sup> ja:
野原	tav <sup>k</sup> ja:	

---

## /h/

[h]無声声門摩擦音 /\_a

[ç]無声硬口蓋摩擦音 /\_i

[ɸ]無声両唇摩擦音 /\_u

以下の二つの由来をもつ。

- \*p : 池間のみ, /p/ が /h/ に変化している
- \*k (a に隣接するもののみ) : 伊良部, 狩俣など

例は表 12 を参照。

## /χ/ 無声口蓋垂摩擦音 [χ]

島尻のみでみられる音で, <\*aka における \*k から変化したもの。例は表 20 を参照。日本列島で唯一の例。

## /v/ 有声口蓋垂摩擦音 [v]

島尻のみでみられる音で, <\*aga における \*g から変化したもの。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

## /Ω/ 有声咽頭摩擦音 [Ω]

伊良部のみで見られる音で, <\*aga における \*g から変化したもの<sup>30</sup>。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

<sup>29</sup>その他の方言で示されているものとは別の由来をもつ語。

<sup>30</sup>これまで声門閉鎖音として記述されていたものに相当する。

## 3. 1. 4 鼻音

## /m/ 有声両唇鼻音

宮古諸方言 \*m に対応。音節の頭子音の場合は両親鼻音だが、成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点を失って/n/に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる方言もある（大浦、島尻、池間、狩俣）。

表 32 有声両唇鼻音

	A-030	A-071	A-127	A-130	A-187
	心臓・肝	馬	水	竜巻	あそこ
上地	kçimu ~ kimu	nu:ma	midz̩i	amainoū	kama
与那霸	k <sup>s</sup> ʒimu	nu:ma	mi <sup>d</sup> z̩l	amaino:	k <sup>h</sup> ama
久貝	k <sup>s</sup> z̩imu	nu:ma	midz̩i	ama.ino:	k <sup>h</sup> ama
伊良部	ts̩mu	nu:ma	mi <sup>d</sup> z̩l	amaino:	k <sup>h</sup> ama ~ k <sup>h</sup> ama:
保良	k <sup>s</sup> ʒmu	nu:ma	mi <sup>d</sup> z̩l	amaino:	k <sup>h</sup> ama
国仲	ts̩mu	n̩u:ma	midz̩i	amainau	kama
大浦	k <sup>s</sup> ʒmu	numa	midz̩l	amaino:	k <sup>h</sup> ama
島尻	k <sup>s</sup> ʒmu	nu:ma	midz̩l	amaino:	kama
来間	ts̩mu	nu:ma	midz̩i	ama.ino:	kama
池間	ts̩mu	nu:ma	midz̩i	amaunau	kama
狩俣	k <sup>s</sup> z̩mu	nu:ma	mi <sup>(d)</sup> z̩i	ino:	kama
砂川	ksmu ~ k <sup>s</sup> ʒmu	nu:m̩ <sub>ø</sub>	midz̩l	amainau	k <sup>h</sup> aq̩ma:
野原					

表 33 成拍的な場合（音節の中核と末尾）

	A-170	A-062	A-059	A-098	A-177
	海	蚊	女	味噌	土
上地	im̩	gadz̩am	midum ~mi <sup>d</sup> ðum	m̩su	m̩ta ~ m̩ta <sub>ø</sub>
与那霸	im̩	gadz̩am	midum <u>o</u>	mts̩u	mt <sup>h</sup> a
久貝	im̩	gadz̩am	midum	msu	m̩ta
伊良部	im̩	gadz̩am	midum	msu	m̩ta
保良	im̩	ga <sup>d</sup> z̩am	midum	mts̩u	m̩ta
国仲	im̩	kadam̩	midum̩	n̩s̩u	n̩ta
大浦	in̩	ga <sup>d</sup> z̩aŋ̩	miduŋ̩	nts̩u	nta

島尻	iŋ	gadaŋ	miduŋ	nsu	nta
来間	im	gaðam	midumu	A: m:su / B: m:so	mta
池間	iŋ	kaðaŋ	miduŋ	nsu	nta ~ mta
狩俣	iŋ	ga <sup>d</sup> zaŋ	miduŋ	nsu	nta
砂川	im	gaðam	midum	m <sub>u</sub> s <sub>u</sub> ~ m <sub>u</sub> s <sub>u</sub>	m <sub>u</sub> ta
野原					

/n/

[n] 有声歯茎鼻音

[ŋ] 有声軟口蓋鼻音 /\_#

宮古諸方言 \*n に対応する音。音節の頭子音の場合は有声歯茎鼻音。成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点が後節する音素に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる。

表 34 有声歯茎鼻音

	A-172 船	B-054 花	A-131 地震	A-079 卵	A-028 骨
上地	fun <sup>j</sup> i		nai	tunaka	puni
与那覇	funi		nai	t <sup>h</sup> unaka	puni
久貝	funi		nai	tunak <sup>h</sup> a	p <sup>h</sup> uni
伊良部	funi	pana	nai	k <sup>h</sup> u:ga	p <sup>h</sup> uni
保良	funi	p <sup>h</sup> ana	nai	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> uni ~ puni
国仲	funi		nai	tunaka	puni
大浦	funi	pana	nai	t <sup>h</sup> unaka	p <sup>h</sup> uni
島尻	funi	p <sup>h</sup> ana	nai	t <sup>h</sup> unasa	p <sup>h</sup> uni
来間	funi		nai	t <sup>h</sup> unuka	p <sup>h</sup> uni
池間	funi	hana	nai	tunaka	huni
狩俣	funi	pana	naw	tunuga	p <sup>h</sup> uni
砂川	ɸun <sup>j</sup> i		nai	t <sub>ø</sub> naka	p <sub>ø</sub> ni ~ p <sup>h</sup> uni
野原		pana			

表 35 有声軟口蓋鼻音（語末）

	A-101	A-121
	茶碗	着物
上地		kiŋ
与那霸		k <sup>s</sup> ŋ / k <sup>s</sup> ŋm <sub>o</sub> nu
久貝	t <sup>ç</sup> habaŋ	k <sup>s</sup> iŋ
伊良部	t <sup>ç</sup> abaŋ	t <sup>s</sup> ŋ
保良	t <sup>ç</sup> abaŋ	k <sup>s</sup> ŋ
国仲		tsiŋ
大浦		k <sup>s</sup> ŋ
島尻		k <sup>s</sup> ŋ
来間	t <sup>ç</sup> abaŋ	tsiŋ
池間	t <sup>ç</sup> abaŋ	tsiŋ
狩俣	t <sup>ç</sup> abaŋ	k <sup>s</sup> iŋ
砂川		kʂn
野原		

/ŋ/

[ŋ]無声歯茎鼻音

[m]無声両唇鼻音 / \_C[ + labial ]

池間のみに見られる音。それぞれ、\*ts<sub>l</sub>NV > ŋNV\*fum > m<sub>o</sub>mV という出自である。  
日本で唯一の例。（下記池間「角」「昨日」 nnu は共に ŋnu の誤りかと思われる。）

表 36 無声歯茎～両唇鼻音

	A-132	A-073	A-163
	雲	角	昨日
上地	kumu	tsiŋu	k <sup>s</sup> iŋu
与那霸	fum	ts <sub>l</sub> nu	k <sup>s</sup> ŋnu
久貝	fumu	tsiŋu	ksiŋu
伊良部	fumu	ts <sub>l</sub> nu ~ ts <sub>l</sub> no	ts <sub>l</sub> nu:
保良	fumu	ts <sub>l</sub> nu	k <sup>s</sup> ŋnu:
国仲	fumu	tsiŋu	tsiŋu
大浦	k <sup>h</sup> umu	ts <sub>l</sub> nu	k <sup>s</sup> ŋnu

島尻	fuma	tsɻnu	k <sup>s</sup> ɻnu
来間	fumu	tsɻnu	tsɻno
池間	ɻmu	nnu	nnu
狩俣	fumu	tsɻu	ksɻu
砂川	ɸumu	tsnu ~ tsɻu	ksnu:
野原			

### 3. 1. 5 流音

#### /ɻ/ 有声歯茎弾き音

宮古祖語の \*ɻ に対応する。頭子音の場合は、各地で安定して [ɻ] で現れる。このほか、成拍的音となることができ、その場合は歯茎側面接近音 [ɻ̪] で現れる方言もある（国仲）<sup>31</sup>。

表 37 有声歯茎弾き音

	A-055	A-092	A-156
	子供（未成年）	鎌	夕方
上地	jarabi	izzara	jusarabi
与那覇		zzara	
久貝	jarabi[新]	zzara	jusarabi
伊良部	jarabi	ɻzara	jusarabi
保良	jarabi	zzara	jusarabi
国仲	jarabi	izzara	
大浦	jarabi	ɻzara	
島尻		zzara	
来間	jarabi	zzara	jusarabi
池間	jarabi	zzara ~ ɻzara	jusarabi
狩俣	jarabi	izzara	jusarabi
砂川	jarabi	zzara	
野原			

<sup>31</sup> 成拍的な /ɻ/ は、\*ɻ̪ を由来とする。表 10 では上地や来間でも側面音が表われているが、それらは音韻論的に /ɻ/ にあたるものである。

表 38 国仲：成拍的 /r/

	A-077 鳥	A-155 昼間	A-126 灰	A-139 光	A-143 東
上地	tou	p <sup>s</sup> ima	karap <sup>h</sup> aλ ~ karap <sup>h</sup> a <sup>z</sup>	pçkal	ayal
与那霸	tu <sup>z</sup> λ	p <sup>s</sup> λma	k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> λ	p <sup>s</sup> λka <sup>z</sup> λ	aga <sup>z</sup> λ
久貝	t <sup>h</sup> uz	psīma	k <sup>h</sup> arap <sup>h</sup> az / p <sup>h</sup> az(i)	pskaz	aḡaz
伊良部	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> λ ~ t <sup>h</sup> uλ	p <sup>s</sup> λ:ma	k <sup>h</sup> ara paλ	p <sup>s</sup> kaλ	aḡaλ
保良	t <sup>h</sup> uλ	p <sup>s</sup> λ:ma	k <sup>h</sup> arapaλ ~ k <sup>h</sup> arapa <sup>z</sup> λ	pskaλ	agaλ
国仲	tūλ	p <sup>h</sup> īl:ma	karapaλ	pīkal	agal
大浦	t <sup>h</sup> uλ	p <sup>s</sup> λma	k <sup>h</sup> arapaλ	pskaλ	(agaλ ~) aλ
島尻	t <sup>h</sup> u <sup>z</sup> λ	p <sup>s</sup> λnaχa / p <sup>s</sup> λma	karapa <sup>z</sup> λ	pska <sup>z</sup> λ	aκaλ
来間	t <sup>h</sup> uz	pssīma	A: karabaλ / B: karabaz	pskal	A: agaλ / B: agaz
池間	tui	hi:ma	karahai	çikai	agai
狩俣	tuω	p <sup>s</sup> λma	karapaω	pskaω	a:ω
砂川	tuz	p <sup>s</sup> λ:ma	karapaz	p <sup>s</sup> ka <sup>z</sup> λ	agaz
野原					

## 3. 1. 6 接近音

/j/ 有声硬口蓋接近音

宮古祖語の \*j に対応する。

表 39 有声硬口蓋接近音

	A-055 子供 (未成年)	A-111 枝	A-165 昔	A-179 家	A-182 戸
上地	jarabi	juda	ŋkja:ŋ		
与那霸		juda	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ		
久貝	jarabi[新]	juda	ŋkja:ŋ	ja:	jadu
伊良部	jarabi	ida	mki:ŋ	ja:	jadu
保良	jarabi	juda	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ	ja:	jadu
国仲	jarabi	juda	ŋkja:ŋ		
大浦	jarabi	ida	ŋk <sup>j</sup> a:ŋ	ja:	
島尻		juda	ŋkja:ŋ		

来間	jarabi	ida	ŋkja:ŋ	ja:	jadu
池間	jarabi	juda	ŋkja:ŋ	ja:	jadu
狩俣	jarabi	ida	ikja:ŋ	ja:	jadu
砂川	jarabi	juda	ŋkja:ŋ		
野原					

### /w/ 有声両唇軟口蓋接近音

日琉祖語から宮古祖語への変化の過程で **w** は **b** に変化しているため、例はごくわずかで、母音 /a/ のみが後続する。「豚」などの限られた語彙のみに出現し、v と相補分布しているため、v の異音である可能性がある。実際に、多くの方言では [w] ではなく [v] に近い接近音 [v] が現れる（与那覇、久貝、保良、島尻、砂川）。その他の方言では重子音、末子音（末子音），音節核の場合は v になり、単子音頭子音の場合は w となっていると考えられる<sup>32</sup>。

表 40 有声両唇軟口蓋接近音

A-075	
豚	
上地	wa:
与那覇	va:
久貝	va:
伊良部	wa:
保良	va: ~ wa:
国仲	wa:
大浦	wa:
島尻	va:
来間	wa:
池間	wa:
狩俣	wa:
砂川	va:
野原	

<sup>32</sup> この理由によって Pellard (2009: 336) では \*v と再建している。

## 3. 1. 7 喉頭化音の有無について

平山(編)1983 などでは一部の方言に /t<sup>?</sup>, ts<sup>?</sup>, k<sup>?</sup>/ の喉頭化音があるとしている。確かに音声的に北琉球に広く存在する喉頭化音に近いものが観察されるが、語頭のみであり、母音を伴って 2 モーラ分の長さを持つ（島尻「人」 ttu<sup>33</sup>）。このため弁別的な要素は長さにあり、喉頭の緊張はそれが閉鎖音であるために音声的に表われるもので、音韻的には重子音として解釈すべきと考えられる<sup>34</sup>。また、北琉球の喉頭化音と異なり、母音の喪失のみに由来している（例：島尻「人」 ttu < 宮\*p<sub>1</sub>tu））。これに対応する音は以下のように表われる。

[t<sup>?</sup>]～[tt]： 池間「煙管」，島尻「人」

[k<sup>?</sup>]～[kk]： 池間「九つ」（報告データ上で kukunutsi とあるが、kkunutsi というバリエーションも存在する）

[ts<sup>?</sup>]～[ts]： 池間「ソテツ」，伊良部「煙管」

表 41 音声的に喉頭化音に近い音が現れるもの

	A-060	B-113	B-027	B-076
	人	煙管	九つ	ソテツ
上地	p <sub>1</sub> su			
与那霸	p <sup>h</sup> <sub>1</sub> t <sup>h</sup> u			
久貝	pstu			
伊良部	pstu	t <sub>1</sub> ts(γ)z	kukunuts <sub>1</sub>	s <sub>1</sub> ts <sub>1</sub>
保良	pstu	k <sup>h</sup> i <sub>1</sub> ci: <sub>1</sub> z	kukunutsi	çuk <sup>h</sup> atsi
国仲	p <sup>h</sup> <sub>1</sub> tu		k <sub>1</sub> ko <sub>1</sub> no <sub>1</sub> tsi	s <sub>1</sub> otetsi
大浦	pstu	ki <sub>1</sub> ci <sup>z</sup> <sub>1</sub>	kukunuts <sub>1</sub>	
島尻	ttu	ki <sub>1</sub> ci <sub>1</sub>	k <sub>1</sub> kunuts <sub>1</sub>	
来間	pstu			
池間	p <sup>h</sup> <sub>1</sub> tu ~ çtu ~ çto	t <sup>h</sup> i: tti:か	k <sub>1</sub> kunuts <sub>1</sub>	tt <sub>1</sub> u:ts <sub>1</sub>
狩俣	pstu	k <sup>h</sup> isiw	k <sub>1</sub> kunuts <sub>1</sub> w	st <sub>1</sub> ts <sub>1</sub> w/s <sub>1</sub> su <sub>1</sub> z <sub>1</sub> w/ssu <sub>1</sub> z <sub>1</sub> w
砂川	pstu ~ pstu <sub>1</sub>			
野原		ki <sub>1</sub> ci <sup>z</sup> <sub>1</sub>	k <sub>1</sub> kunuts <sub>1</sub>	sotets <sub>1</sub>

<sup>33</sup> 宮古諸方言では語は最小で 2 モーラである。

<sup>34</sup> 名嘉真 1984 にもこの見解が示されている。また、与那国などの喉頭化音と異なり、規則的ではなく語彙的な変化で数が少なく、一部の方言の一部の語彙に現れるのみである。

### 3. 2 子音体系

以上、宮古諸方言の子音を音素ごとに見てきたが、子音体系という点からは、以下のようにまとめることができる。

- 全ての方言がもっている音素  
/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, h, m, n, r, j, w/
- 一部の方言だけが持っている音素
  - /χ/ : 島尻
  - /g/ : 島尻
  - /Ω/ : 伊良部
  - /N/ : 池間

### 4 音節

現在のところ、宮古諸方言において音節を主要な音調規則の単位としてとりあげている報告はない。ここでの音節は、主に形態音韻論や音素配列上の記述の単位として用いるものである<sup>35</sup>。

音節構造は 2.1.4 節で議論した成節子音をどの程度認めるか、また前節に述べた喉頭化音を認めるかどうかとも連動しており、さまざまな解釈がある。ここでは、成節子音は /v, m, n, r/ のみとし 3.1 節にあるように語頭の重子音をみとめる立場をとるので、音節構造は (5) のようになる。

(5) i) (C<sub>1</sub>)(C<sub>2</sub>)(j)V(V)(C<sub>3</sub>)

ii) (C<sub>4</sub>)C<sub>5</sub>(C<sub>6</sub>)

このうち、i) が母音が音節核となるもの、ii) が子音が音節核となるものを示している。

- C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>双方が埋まる場合は、摩擦音もしくは共鳴音 /s, z, f, v, m, n, r/ の重子音<sup>36</sup>もしくは C<sub>1</sub>を /v, m/ とする部分重子音となる。また、池間や島尻、伊良部

<sup>35</sup> 従って、例えば CCV の一つ目の C が 1 モーラの長さを持つなど、一般的な音節の理論には当てはまらない性質もある。

<sup>36</sup> 「虱」 ssam や「子」 ffa などの重子音は狭母音の摩擦化->後続流音、半母音の同化によって生じたものと 2.1.4 節で述べた。同じ音変化を経た名詞形態音韻論の解釈においてはこの摩擦化する母音をそのまま残している半面、前者のような場合は母音のない重子音としている。これは、前者がすでに終った変化であり、名詞形態論と同様の共時的分析をする必要がないこと、また島尻「人」 ttu のような語頭の閉鎖音の重子音のために CCV という音節が必要であり、「虱」 ssam などにもそれを適応することができるためである。

などでは、t, k, tsなどの破裂音・破擦音も重子音としてC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>を埋めることができる。

例) 「虱」ssan, 「子」ffa, 「土」nta, 「人」ttu

- C<sub>3</sub>には/v, m, n, r/がはいる (rは国仲のみ。また、池間のみ、vはここに入らない。)。
- VVには長母音、異なる母音の連続両方が入りうる。しかし、方言によってどのような母音連続が存在するのか(しないのか)などは、本稿では扱えていない。
- C<sub>6</sub>にはC<sub>5</sub>と同じ子音が入る(=長子音)。C<sub>5</sub>にたつことのできる子音は、/v, m, n, r/である(池間のみ、vはここに入らない)。また、C<sub>4</sub>をもてるのは/r/のみ(国仲)で、C<sub>4</sub>には唇音(p, b, m)のみが入る。

例) 「売る」vv, 「芋」mm, 「葦」mrrna ([ml:na~mi:na])

## 参考文献

青井隼人(2010)「南琉球方言における「舌先的母音」の調音的特徴：宮古多良間方言を対象としたパラトグラフィー調査の初期報告」『音声研究』14(2): 16-24.

青井隼人(2012)「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8: 99-113.

Hayashi, Yuka (2011) Ikema (Ikema Ryukyuan). In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan language*, 167-188. Tokyo, ILCAA: 167-188.

平山輝男(1964)「琉球宮古方言の研究」『国語学』56: 61-73.

平山輝男・大島一郎・中本正智(1967)『琉球先島方言の総合的研究』東京:明治書院.

平山輝男(編)(1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京:桜楓社.

五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之(2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16-1:134-148.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1952) *Preliminaries to Speech Analysis*. Cambridge MA: MIT Press.

加治工真市(1989)「宮古方言音韻論の問題点」『沖縄文化：沖縄文化協会創設40周年記念誌』421-439.

かりまたしげひさ(1986)「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』22(2): 54-64.

かりまたしげひさ(1987)「宮古方言の成節的な子音をめぐって」琉球方言研究クラブ30周年記念会編『琉球方言論叢』419-429.

かりまたしげひさ(1996)「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき-空気力学的な観点か

らみて-」『言語学林』96-97: 709-722.

かりまたしげひさ(2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11: 67-113.

かりまたしげひさ(2007)「琉球語音韻変化の研究」京都大学特別講義資料.

北村=サムエルH.(1960)「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41: 94-105.

Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*. Oxford: Blackwell.

仲原穣(2001)「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26: 105-123.

名嘉真三成(1984)「宮古のことば」『新沖縄文学』61:121-127. 沖縄タイムス社.

名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』東京: 第一書房.

大野真男・久野眞・杉村孝夫・久野マリ子(2000)「南琉球方言の中舌母音の音声実質」『音声研究』4(1): 28-35.

Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.

Pellard, Thomas (2011) *Ōgami (Miyako Ryukyuan)*. In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan languages*, 113-166. Tokyo, ILCAA.

崎山理(1963)「琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『音声学会会報』112(2):18-19.

崎山理(1965)「平山輝男氏論批判琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『国語学』60.

沢木幹栄(2000)「宮古方言の問題点」『音声研究』4(1): 36-41.

下地賀代子(2003)「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28: 93-113.

Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language*. Ph.D. dissertation, The Australian National University.

Shimoji, Michinori (2011) *Irabu Ryukyuan*. In Yamakoshi, Yasuhiro (ed.) *Grammatical sketches from the field* Tokyo, 77-131. Tokyo: ILCAA.

Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) (2011) *An Introduction to Ryukyuan language*. Tokyo: ILCAA.

Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan Language History*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.

上村幸雄1997「音声研究と琉球方言学」『ことばの科学』8: 17-47.

Zec, Draga (2007) The Syllable. In Paul de Lacy (ed.) *The Cambridge handbook of phonology*, 161-194. Cambridge: New York, Cambridge University Press.